

聖書 ミカ書7章14〜20節、ヨハネ福音書5章19〜36節

19節〜20節でイエスは次のように明確に宣言しておられます。『子は、父のなざることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなざることはなんでも、子もそのとおりにする。父は子を愛して、御自分のなざることをすべて子に示されるからである』と言っています。父なる神に対して子であるイエスは、父である神のなざることはなんでもその通りにすると言っているのです。つまり、イエスは神と一体性の関係にあるということです。なぜ、イエスと神が一つなのか。それは「御父から独立して行動していない」からです。第二の理由は、神がイエスを愛しておられるがゆえに、御自分がなざることを、すべてイエスに知らせておられるからです。けれども、父なる神と子なるイエスが言った一体であるということは、イエスが神の意志通りにロボットのようになり、自分の意志なしに従うということではありません。

このイエスと神との関係性は、重要な視点を私たち信者に与えます。信者は神の意志を考えて行動します。けれども、それは神の意志通りにロボットのようになり行動することではありません。第一、新約聖書で描かれている神の意志は、絶対的な戒律としての「〜すべからず」「〜すべし」というような二分法の世界観ではありません。信者は人生のいろいろな分岐点で、神の意志がどこにあるかを考えて自分の行動や生きる方向性を考えますが、絶対的な神の命令がないのです。それと同じように、イエスも神の意志を確認しながら公の活動を弟子たちと行って来て、最後に十字架に向かう道が神の意志であるとの啓示を受けて、十字架刑死を受け入れたのです。そこにはゲッセマネの祈りが現わしているように、イエス自身の苦悩もあつたのです。つまり、イエスと神は一体性の関係にあつたのですが、イエスは神の意志がどこにあるかを常に考えながら、神の支配の現実をどのように人々に知らしめようかと腐心しておられたのです。

それと同じように、私たち信者も、イエスという確かな道案内人がおりますが、神の意志がどこにあるかを現実の生活の中で迷いながら追い求めていくしかないのです。そして、神の意志がどこにあるかを自分が求道していくだけでなく、自分以外の人々に対しても神の意志がどこにあるかを示していく務めも与えられているのです。

最近、ヤマザキ動物看護大学時代のゼミ生が中国の浙江(せつこう)大学の博士課程に中国政府の奨学金で留学することが決まったとの報告があつて、久しぶりに会つたのですが、同じ教会の教会員の弁護士から、中国政府の奨学金で留学するのは、ウイグル族への弾圧に加担することになるのではないかと言われたと少し意気消沈していました。もちろん、中国政府が奨学金を出すというのは、中国に対する理解を深めてほしいという意図があることはわかりますが、それが直接ウイグル地区への弾圧を是認することにつながるというのは、いかにも二分法で世界を見ている人物の意見だなと感じました。ウイグル自治区では綿花の栽培が中国当局によってウイグル族への強制労働の結果として問題化しました。日本企業のユニクロや無印良品を手がける良品計画などが、この問題で批判を受けることになりましたが、このグローバル化した世界の中で、自分が全くウイグル族への弾圧に関与していない生き方ができるわけもなく、極端に言えば、綿製品を全く自分が使用しないのであれば、ウイグル自治区への弾圧に加担しないことになるかもしれませんが、シャツだけでなく、タオルやベッドのシーツなど数え上げたらきりがなくらいです。その弁護士が考えるほど単純ではない世界に私たちは生きています。

浙江大学は中国では北京大学や精華大学について3位ですが、日本の京大よりも上のランクの大学です。問題は、実際に中国で勉強して、中国の課題を日本にわかりやすく伝えて、中国と日本のかけ橋の一翼を担うことだと励ましたのですが、このようにウイグル自治区の問題を単純に考えて判断を下すところが、キリスト教信仰の潔癖主義に根差していないだろうかと少し心配になりました。

神の意志を見極めることは簡単なことではありません。イエスもゲッセマネでの祈りで、イエスは自分が願うことではなく、御心に適うことが行われますように、と祈りました。自分の願望ではなくて神の御心がどこにあるかを探求求めたのです。私たち信者も、祈りの中で、自分の願いが相対化され、神の御心が実現するように祈り求めていきたいものです。

この世的な価値観で言えば、キリスト教信仰は個人の願望の実現ではなくて、神の御心の実現を求めていくのですから、この世的な宗教とは、この点で一線を画するものです。このことを象徴するような物語が旧約聖書にあります。イスラエル民族の開祖であるヤコブには最愛の妻ラケルがいました。ところがラケルは難産のために、ヨセフの弟となる末子ベンヤミンを出産してすぐに亡くなってしまいます。最愛の妻ラケルを失ったヤコブは、彼女の最初の息子ヨセフを溺愛します。

父ヤコブから溺愛されているのをよいことに、ヨセフは兄たちを見くびるようになります。兄たちが自分にひれ伏すと解りできる夢を臆面もなく兄たちに語って聞かせたりもします。それが兄たちの憎しみや嫉妬を増幅させました。ヨセフが1

7歳になったときです。ある時、父ヤコブは彼の羊たちを放牧している兄たちの様子をヨセフに見に行かせます。やって来るヨセフに気づいた兄たちはヨセフを殺してしまおうと相談します。悪い野獣に食い殺されてしまったことにしてしまおうです。そこで、ヨセフは衣服をはぎ取られ、生きたまま水溜の穴に投げ込まれました。折しも、ミドヤン人と呼ばれるイシユマエル人の隊商がそこを通りかかりました。上から4番目の兄ユダの提案で、ヨセフは銀20シケルで隊商売り渡されてしまいました。兄たちは、ヨセフからはぎ取った衣服を雄山羊の血に浸して、父親ヤコブのところに送り届けました。父ヤコブは野獣にかみ殺された信じ込んで「ああ、わたしもあの子のところへ、嘆きながら陰府へ下って行こう」(創世記37章35節)と言って嘆きました。

隊商に売り渡されたヨセフはエジプトに連れて行かれ、ファラオの侍従長ポティファルに買い取られました。ポティファルはヨセフのすることがすべて首尾よくゆくことを知り、ヨセフに家の全財産を管理させるようになります。そこに誘惑が待ち構えていました。ポティファルの妻がヨセフを誘惑するようになります。けれども、ヨセフはこの誘惑をきっぱり断ります。言い寄るたびごとに拒絶されたポティファルの妻は、ついにヨセフの上着を掴み、ヨセフが自分に言い寄ったとの諫言の証拠として使用人や夫に見せて、ヨセフは何の罪もないのにファラオの囚人が収監されている牢獄に投げ込まれます。

投獄されたヨセフは監獄でも働き者でした。監獄長から信頼され、囚人たちの世話係となります。そこにはファラオの側近2人が収監されていました。彼らの夢を解き明かしたヨセフでしたが、その2年後、ファラオが2つの奇妙な夢を見ました。一つは牛の夢で、ナイル川のほとりに肥え太った雌牛が草を食んでいると、痩せ細って醜い7頭の雌牛がナイル川から上がって来て、肥え太った7頭を食べ尽くしてしまっただけです。もう一つは、麦の穂の夢でした。1本の茎から7本の穂が出ており、豊かに実っていた。ところが、東から吹く熱風で干からびた7つの穂が生え出てきて、豊かに実っていた7本の穂を呑み込んでしまったのです。この夢に胸騒ぎを覚えたファラオは、エジプトの賢者や占い師に夢を語って聞かせますが、その夢を解釈できる者はいませんでした。監獄でヨセフの夢解きのことを思い出した人物がファラオに告げたことで、ファラオの前に連れだされたヨセフは、その夢によって神がこれから起こることをファラオに示そうとしておられるのだと言って、おおよそ次のようにファラオの夢を解き、その対応策まで伝えました。肥え太った7頭の雌牛も実った7本の麦の穂も、今後7年間、大豊作が続くことを表している。しかし、その後には、7年間の激しい凶作が続く、それまでの大豊作であった国を飢饉に陥れてしまうだろう。神がその夢でファラオに告げようとされたのである。それゆえ、2

エジプトの王としてなすべきことは、7年の豊作後に訪れる7年の凶作に対処できる賢明な人物を立てて、豊作時に収穫の5分の1を徴収させ、彼に国の管理を任せることである(創世記41章26〜35節)。

これを聞いたファラオと臣下たちは大いに感心し、ヨセフをエジプト全土の宰相に任じました。果たして、豊作の7年がやってきました。宰相に任じられたヨセフは、豊作の7年間、国中の穀物を備蓄しました。夢のお告げ通り、豊作の7年が終わると、飢饉の7年が始まりました。飢饉はあらゆる国におよび、穀物を買入れるためにエジプト人はもとより、諸外国から人々がヨセフのもとにやってきます。カナンの地に住むヤコブも穀物の買い付けをするために息子たちを遣わします。ヨセフの前にひれ伏す兄たちにヨセフはすぐ気づきます。しかし、最初は素知らぬふりをしますが、2度目に来た時、兄弟たちを邸宅に招き、食卓を調えさせます。ヨセフは父の安否を問い、弟ベンヤミンをじつと見つめます。それでもヨセフは兄弟たちに身を明かさずとはしません。ヨセフは運べる限りの穀物を持たせて兄弟たちをカナンに送りだしますが、ベンヤミンの荷袋に銀の杯を忍ばせておきました。そして、部下に一行の後を追わせてベンヤミンに盗みの嫌疑をかけて、彼を連れ戻すと、末の弟の身を案じた兄たちも一緒に引き返してきました。そこで、兄のユダがヨセフの前に進み出て、末弟ベンヤミンを大切にしている老いた父ヤコブのことを詳しく語り、ベンヤミンのことは自分たちに責任があると伝えます。それを聞いたヨセフは、湧き上がる感情を抑えることができずに、声をあげて泣きながら身を明かします。そして、父ヤコブを連れてエジプトに移住することを兄弟たちに進言します。こうしてヤコブ一族はエジプトに移住してきます。

このように、ヨセフ物語では、人間的な判断や行動によって事態が進行していくのですが、ヨセフが兄弟たちに自分の身を明かす場面で次のように言う言葉に注目したいと思います。『わたしはあなたがたがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし、今は、わたしをここに売ったことを悔んだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです』(創世記45章4〜5節)。

このヨセフのように、苦難に遭遇されてエジプトに売り渡され、そこでも苦勞して、宰相に上り詰めたのですが、それは飢饉に陥った一族を助ける神の摂理で、自分がエジプトに遣わされたのだということに気づいたのでした。このように、神の御心に気づくためには思いもよらぬ回り道もあり得ることを肝に銘じたいと思います。神の御心に気づかされるか否かは、ヨセフのように、神の御心を夢解きという手法で常に心に留めている人間にもたらされるのです。